大人の暮らし＝自分らしさの追求

佛教大学　田中智子

「少しばかりの敬意と平等が欲しい」
「精神科施設のメシはまるで豚のエサ」
「いつかグループホームを爆破してやる」
「権力者はペテン師だ　俺たちを閉じ込める」

ちょっと驚くような言葉が並んでいますが、これは日本でも公開されたフィンランドの映画『パンク・シンドローム』の主人公で、知的障害当事者のパンク・バンド〝ペルッティ・クリカン・ニミパイヴァト〟の歌詞の一節です。ライブには多くの観客を動員し、国外公演もする実力バンドです。私の今年一番のお薦めでもあるこの映画を紹介しつつ（ネタバレになりすぎないよう気をつけます）、大人の暮らし方について考えていきたいと思います。

◆暮らしのミニマム「ハコ・ヒト・ジカン」

大人の暮らしとは、自分らしさを追求していく、そのプロセスとしての日々の営みそのものを指すのではないでしょうか。

そのためには、暮らしに求められるミニマム＝どこで暮らそうとも保障されるべき最低限についての社会的な一致点をつくることが重要です。私は、今のところ、それは暮らしに関わる「ハコ・ヒト・ジカン」だと考えています。

まず「ハコ」とは暮らす場の条件のことです。早川和雄さんは『居住福祉』のなかで「住まい」とは、「居住という物理的な『居住空間』の存在が、いのちを守り、日々の生活行為の場を提供する」と書いています。住まいには、いのちを守る安全な環境と、自分の生活をする舞台としての機能もあるのです。映画のなかの一コマに、グループホームで暮らすメンバーの一人が、自分の誕生日にバンド仲間やスタッフをパーティーに招待するというシーンがありました。彼は、紅茶とお菓子を準備し、花を飾って客をもてなします。そしてみんながゆったりとくつろいだ時間を過ごしていました。その映画を観た学生のなかには「日本のグループホームとのちがいに驚いた」という感想を寄せた人もいました。日本の一般住宅にも言えることですが、特に障害のある人たちの暮らしの場は、入所施設であってもグループホームであっても、「家」ではなく「部屋」としか言いようのない現状にあります。時には客も招いたりしながら、自分らしさを演出する舞台に必要な環境が住まいには求められています。

また暮らしには、安心できる「ヒト」として、場面に応じた多層的な関係性があることも重要です。映画のなかで、あるメンバーが他のメンバーとぶつかるのですが、彼はグループホームに帰る前に、足のケア（フィンランドでは福祉サービスとして提供）に行って、そこのスタッフにひとしきり愚痴を言って、すっきりした表情で出てきます。ここでは、足のケアのスタッフが、毎日顔を合わせる人でないということがポイントです。日常を共有しない人（私たちに置き換えてみるとたまに会う友だちや飲み仲間!?）がいるからこそ、うまく気分転換でき、日々の暮らしがスムーズにいくのだと思います。

そして、「ジカン」の使い方も、当然ながら人それぞれです。例えば、「どこで誰と食事をするか」「何時に風呂に入るか」ということは些細なことですが、毎日の生活のなかでは重要な事柄です。「一人で」「一緒に」をその日の気分や状況に応じて柔軟に選べる「オーダーメイド型」の生活であることが大事で、集団のルールや制度や支援の枠組みに個人が合わせる「レディメイド型」の生活であってはならないのです。

最後にこれらを支える「おカネ」の問題も重要です。同時代を生きる同世代の人と同等の生活＝ノーマルな生活を実現するためには、ノーマルな所得が必要です。

以上のことは、どこで、誰と暮らそうと皆に保障されるべきことだと、私は考えています。しかし、残念ながら今の日本では、一般的にも「社会が保障すべき暮らしとはどのようなものか」という議論は軽視されがちです。単に「生存」するだけではなく、人間らしい、大人としての暮らしはどうあるべきかという議論自体を社会のなかで育てていくことが必要で、そのために実践現場から、あるいは当事者からの発信は重要な意味をもちます。

◆ノーマルな暮らしでつくられる「語りたい自分」

冒頭の歌詞に込めたメンバーの思いは、自分たちには「言いたいことがある！」という強烈なものです。

ノーマルな暮らしの先にあるのは「語りたい自分」なのだと思います。さらに言うと、「物言う当事者」なのだと思います。スタッフからすると懸命に支援しているのに「グループホームを爆破する」なんて言われたらたまったものではありません。しかし、それは、「自分には望む生き方がある」と社会に向けて言える当事者をつくりだしたという点で、フィンランドの福祉が成功していることの証でもあると思います。

映画のなかでメンバーは、さまざまな経験をしています。バンドメンバーとの衝突や、恋人との恋愛や結婚、なかには政党党首の追っかけをして政党のパーティーに参加している人もいました。同時代を生きる人たちとの同等の経験は、彼らが自分の人生を考えるうえでの必要不可欠な材料です。

先日、成人期の知的障害当事者を対象にしたワークショップのなかで、暮らしについて議論しました。そのなかで、ある人が、グループホームを選んだきっかけを次のように話してくれました。

…私は、将来、結婚して子どもが欲しいと思いました。そのためには、親から離れて生活することが大事だと思い、ホームに行こうと決めました。

お母さんにホームに入る話をしたら、反対しました。お父さんは賛成してくれました。たぶん、私が「自立すること」を考えてくれたからだと思います。お母さんには、職員さんからいろいろ話してもらいました。私は、お母さんは反対したけど、自分は絶対ホームに行く、と決めていました。

支援を考えるうえで、本人のなかに「こうしたい」という思いを育てることが出発点です。そして、施設なのかグループホームなのかという場の選択が重要なのではなく、どのような人生を生きたいのかという人生の文脈のなかに位置づけていくことが重要です。

◆自己決定ではなく共同決定を

福祉の現場では最近よく「自己決定」という言葉が聞かれます。それは、自分のことは自分で決める（さらにその結果も自己責任として引き受ける）という意味です。それには、「自分は自分のことをよくわかっているということ」そのうえで「自分は自分にとって最善の選択ができること」という前提があります。このような資本主義的合理性を批判して、ノーベル経済学賞をとったアマルティア・センは「合理的な愚か者」と表しています。

私は、特に、「暮らし」という全体で一致する正解がないものについて、この前提は当てはまらないと考えています。「自分はどういう暮らしがしたいか」ということは、そもそも自分だけではわからないものだし、「やってみないとわからない」という側面もあると思います。だからこそ、支援者と相談する、自分の見本となる人にあこがれる、自分の気持ちを他の人に話してみるなどのさまざまな機会を通じて、他者との共同決定こそが尊重にされるべきで、そして、失敗したらいつからでもやり直せるという制度や社会のなかに安全網があることが重要なのではと思います。

（たなか　ともこ）